

コメント：「古典」か「雑誌」か

思想史というと、明治以後は現代史ですから、特別に訓練しなくても資料も読めますし、書誌学的な勉強も必要としない。すくなくとも学問的分業の上からいって日本の思想史の研究となるとどうしても明治時代以前にさかのぼる必要があります。しかも政治思想ということになると当然なことです。まず儒教の勉強からはじめねばならない……（丸山眞男『文明論之概略を読む』）

同じ「文系」研究者、さらにその中でもあるテキストを材料にするという点では共通する研究者の間でも、そのテキストの扱い方、読み方はかなりの程度異なる。それはこの学会にいる多くの人が実感されているところで

河野 有理

あろう。だがしかし、そうした多様性が、たとえば一つの共通の「古典」の存在によって、ある種の調和へと導かれることがあることも。

ひるがえって、思想史の「近代」を画する条件の一つに、このような「古典」の不在があることもこうした学会だからこそ気づかされる。そして、ごく大ざっぱに言うてしまえば、その代わりとして存在するのが、たとえば「雑誌」メディアという場なのではないか。それがこのシンポジウムの狙いであり、メッセージであろう。

筆者が専攻する政治思想史についてはとりわけそれは妥当する。近世期における政治思想は概ね、儒学經典に対する解釈の試みとして、あるいは統治者に対する私的

な建言として表出されてきた。これに対し、明治期以降の政治的主張は、新聞や雑誌のように基本的には公開された言論において展開されることがほとんどなのである。もちろん、これは誇張を含んだ戯画であるが、大筋において間違っていないだろう。

冒頭に引用した丸山眞男は、おそらく、確信的にこうした状況に抗しようとした思想家であった。彼は例えば福沢諭吉を「あたかも古典のように」読もうとした（本書はあくまで『文明論之概略』という近代日本の古典——私はこれを古典と信じて疑わないが——に即した思想的注釈にほかならない）。丸山眞男『文明論之概略を読む』。本稿冒頭の引用におけるように、彼の明治研究において書誌学や史料論があたかも軽視されているかのように見えるのは、単にその当時の明治史がほぼ現代史であったというプラクティカルな事情だけでなく、「古典」として読むための歴史主義的読解のいわば「方法」的軽視という側面があったことは見逃すべきではないだろう。

丸山の福沢論は成功した。だが、それは丸山自身の技量もさることながら対象が福沢だったからという要素もおそらく大きい。以後の研究史は、丸山が福沢に適用した方法を他の思想家に当てはめようとして失敗してきた歴史と見えなくもない。福沢以外の思想家を彼らが福沢

に似ていないという理由で「群小思想家」などと評価せざるを得ない始末だった。丸山の成功の副作用は大きかったといべきだろう。

もちろん、このような路線をすべての政治思想史研究者が拳拳服膺してきたわけではない。福沢の「哲学」ではなくその「戦略」を問題にした平石直昭が、たとえば、その別様の道を追求した例である（平石直昭「福沢諭吉の戦略構想——『文明論之概略』期までを中心に」一九九九年）。福沢の『学問のすすめ』を、丸山のようにいわば哲学書として読むのではなく、ある特定の歴史的状況に深く規定された政治パンフレットとして読もうとするその姿勢は、松田宏一郎による陸羯南研究についても見てとれることが出来よう（松田宏一郎「陸羯南——自由に公論を代表す」二〇〇八年）。

「近代の活字メディアを史料として読むことに、私たちはどれほど意識的であろうか」（中野目徹「『明六雑誌』の異刷本について」、『書生と官員』二〇〇二年）と問いかけられ、「思想史の立場から、史料としての雑誌をいかに解読していくべきかというのが私の研究課題の一つ」（同）とされる中野目氏が、やはり、こうした意味での「古典」よりも「雑誌」の立場に拠っているであらう。

うことは見やすい。また、丸山の「ファシズム」研究を、「むしろ、問題は日本ファシズムを「ドイツやイタリアに比しても一層低級かつ荒唐無稽な内容」と切り捨てたことで、その後のファシズム研究が『キング』のような大衆雑誌の分析に向かう道を塞いだことであろう」（佐藤卓己『キング』の時代——国民大衆雑誌の公共性——二〇〇二年）とする佐藤氏についても同様のことが言えよう。

もちろん、お二人を「雑誌」の人という形でくくりにすることには異論もあろう。一方は、思想史の内部でメディアについて考えてこられ、他方は、思想史の外部から、思想史を相対化する形でメディア論の問題としてこの問題を考えてこられた。こうした違いは、さらに対象とする時代自体に起きた変化によって、方法上正当化されているようにも見える。永嶺重敏（『読書国民』の誕生——明治30年代の活字メディアと読書文化——二〇〇四年）を補助線に、明治三十年代の博文館文化、大衆化や国民化といったキーワードを分水嶺にして、それ以前が中野目氏の、それ以後が佐藤氏のメインの研究領域であると仮にするならば、それは「雑誌」が結社の政治的主張の素直な反映として読むことができる時代と、そうではない時代と見ることもできよう。思想がある意味いかにも思想らしい時代と、思想が商品として、検閲とい

う政治的な制約条件を有しつつ、資本の最大化を目指す運動として理解した方が適切な時代というように。

だが、「方法」と「対象」の微細な違いにこだわるよりは、「雑誌」の人という大きくくりの方が生産的な場合はないだろうか。まず、お二人の「方法」は本当に違うのだろうか。たとえば佐藤氏は、ご自分の研究を思想史と差異化する形で説明されていることが比較的多いようにお見受けするが、評者自身は佐藤氏のご研究を思想史研究として愛読するものである（反対に、佐藤氏が「思想史」的とされているものについてあまりピンとこない）。昨年度、本研究大会でも議論したように、「思想史」の方法は、いくつかの明確な「禁則事項」を共有しつつも、基本的には多様であろう。無論、概念の外延を拡張しすぎる（帝国主義的）態度は問題であろうが、先の「古典」・哲学パラダイムを引き合いに出すならば、テキストを権力獲得のための「武器」とみなす読解も、テキストを資本の最大化を目指す「商品」とみなす読解も、大した違いはないと言えるのではないか（おそらくこの三つともさしたる無理なく「思想史」として成立するのではないか）。また、対象についてもどうだろうか。今日の両氏の御報告をうかがって改めて感じたのは、日本の「近代」の短さと容易に裁断を許さないその混沌である。明治・大

正・昭和といったところで、三宅雪嶺はその間ずっと生きて発言していた。そして野依と雪嶺というあらゆる意味で対照的人間に見える両者の関係はとても深いものであった。

雪嶺については、恐らく柳田泉著『哲人三宅雪嶺』

（昭和三十一年、実業之世界社）がもつとも委曲をつくした本ではないかと思う。この本の巻末に著作目録があるが、「実業之世界社」から出版した本がじつに多いことに驚く……野依は「脅迫罪」で懲役刑を受け、世間の評判は良くなかった。「会社ゴロ」というのが大方の見方であった。そういう人物を雪嶺は近づけただけではなく、著書の多くの出版をゆるした。これは一体どうしたわけか、そういう疑問に答える記述は、柳田の本には一行もないのである。しかし雪嶺、そして野依という人物の真実は、この空白の部分にこそ、あるように思われる。（小島直記「四尺八寸七分の男 三宅雪嶺と野依秀市」、『日本策士伝』一九八九年）

いわば「思想」人間そのものに見える雪嶺と、「メデイア」人間（佐藤卓己氏の表現）そのものに見える野依のこの親しさ、そして共闘関係をどう考えるか。そのこと

はこの短くて混沌とした日本の「近代」思想史を考える鍵の一つであろう。「雑誌を読む」ことを研究上の主たる生業とする研究者同士が、対象と方法の違いに関わらず、半ば意図せずして協同する可能性を見せられた思いがした。

（首都大学東京教授）